



著 作 者：Rushen!

ライセンス：Creative Commons BY-NC-ND

*英語でがんはCancerというがCancerとはカニのことである。医学の父、ヒポクラテスが乳癌の形状をカニに例えたことからこの名がついたと言われている。

「内なる敵」

院 長 林 田 良 三

今回は日本人にとっていまや国民病となった「がん」についてお話をしたいと思います。昭和56年に日本人死因の第一位となったがんは患者数、死亡者数ともに右肩あがりに増え続けています。現在では日本人の二人に一人ががんになり、三人に一人ががんで亡くなっています。がんが国民病とまで言われる所以です。それではなぜ、日本ではがんはこのように増えているのでしょうか。それは日本が世界一の長寿国になったためだと考えられています。がんは年をとればとるほど罹りやすくなる病気なのです。がんは私達の体の細胞内で遺伝子の突然変異が幾重にも重なって発症すると考えられています。老化により発がんに関与する遺伝子の突然変異が起こりやすくなっていることが最近の研究で次第に明らかになっています。

このように現在、がんの研究は顕微鏡レベルからさらに進み、遺伝子レベル、分子レベルで

行われるようになってきました。これにより今まで顕微鏡でいくら見てもわからなかったがんの正体が次々と明らかになっています。また、それに基づいて「分子標的治療薬」や「免疫チェックポイント阻害薬」と呼ばれる新しいがん治療薬が次から次に開発され、医療の現場で使われるようになっていきます。今後のその成果には大きな期待がよせられています。

ただ一方でがんという病気の正体が見えてくるようになって、明らかになってきたことがあります。それは私達人間が進化の過程で獲得してきた生き抜くための術をがんも身につけているということです。これは考えてみれば、あたりまえのことかもしれませんが。がんはもとはと言えば、私達のからだの一部だったのですから。がんはまさに手ごわい「内なる敵」なのです。

無制限、無秩序に大きくなっていくことや転移をおこすこと、大きくなるために必要な栄養を確保するため、自分のまわりに新たに血管をつくりだすこと、正常細胞とは明らかに異なる細胞に変化しているのに免疫細胞の攻撃から免れていること、効果があった薬がやがて効かなくなることなど、がんが持っているこのような能力は人間が本来もっているしくみをうまく転用し、利用しているのです。がんにも有効な新しい治療薬がでてきても、やがて自分の遺伝子を変異させて、その治療薬に対する耐性を獲得してしまいます。

しかし、がんの遺伝子変異研究（ゲノミクスと言われています）やその結果生み出され、がん細胞にさまざまな作用をするたんぱく質の研究（プロテオミクスと言われています）はがんの真の姿を徐々に明らかにしています。

人類ががんを克服できる日はそう遠くないのかもしれませんが。

